**引田　渙也　選**

**秋田　美津子　作**

波うらら沖に漁船の影曳いて
古寺の玻璃戸きしみて梅雨に入る
縁有りて来た道はるか晩夏光
雲流れ相輪照らす月赤し
つなぐ手の温もり知るや雪催ひ

**鈴木　久米男　作**

流しびな川辺の葦に揺れにけり
後ろ髪引かれる勿来の山桜
打ち水の祇園小路やだらり帯
仲見世を背中団扇の浴衣っ娘
渓谷のトロッコ列車秋が行く

**長岐　途夢　作**

新緑に艶出す雨の滴かな
悠然と面掠め行くおにやんま
高山や色なき風の過ぐる街
蛇口には去年の水かなぽたぽたり
出勤の面にはりつく余寒かな

**西　修一　作**

初春や松吹く風の新しき
道端に咲きて西向く都草
高原のカフェの憩いや夏の街
古稀迎ふ妻の祝ひの月見酒
秋惜しむ雨滴ひとつの重さかな

**引田　渙也　作**

初歌舞伎楽屋詣での贔屓客　（一字俳句　楽）
雲少し集めて枝垂れ桜かな
うららかや仔犬抱く子の滑り台
来ぬ人を待ちて眩しき新樹かな
和太鼓に笛おごそかに初神楽　（一字俳句　和）

（文責：俳句部会幹事　西）

以上